



図4-1 古代の吉備の穴の海

作成)株式会社フジタ地質(カシミール3D使用<<http://www.kashmir3d.com>>)  
出所)国土地理院発行数値地図(一部改変)

側、総社市の作山古墳、こうもり塚古墳、岡山市の造山古墳、都月坂古墳、瀬戸内市の築山古墳など、二〇以上の古墳をつなぐ線が海岸線を形成している。これは、古代人が瀬戸内海を旅した海路であると考えられる。

その距離は、神戸市三ノ宮から関西空港(泉佐野市)までの大阪湾岸に相当する約七〇キロメートルある。瀬戸内海の難波津から穴門(下関)までのおよそ四〇〇キロメートルの航海のかなりを占め、その海岸線が囲む中心の海は、当時、穴の海と呼ばれ、四世紀には瀬戸内海航路の要になっていた。

### ● 出雲と吉備はヤマトより繁栄していた

『日本書紀』で素戔鳴命や国譲り神話によってヤマト王権の支配下になる出雲、吉備氏の乱で雄略天皇に征服される吉備は、かなり大きな国であったと考える。この二つの国は、古墳時代からヤマトと呼ばれる近畿より繁栄していたと考える。面積の比較ではなく、出雲、吉備のほうが大陸文化をより早く取り入れることができたからである。

遺跡などから近畿地方と比較しながら、出雲と吉備、出雲にかかわる伯耆を見てもみよう。

まず、日本海側の出雲は、島根半島がかぶさる島根県出雲市、雲南市、松江市、安来市、鳥取県米子市、境港市を経て美保湾を臨む大山町まで、大阪湾岸より長い約七〇キロメートルの古宍道湖を中心とする水路で結ばれていると考える。

一方、吉備は紀元前から中世まで、岡山から倉敷にかけての岡山平野を中心とする国であるが、古代は海の底であった。すなわち、現在の吉井川、百間川、旭川、そして少し離れて高梁川が流れ込む大きなデルタ地帯で、現在の山陽新幹線の北